

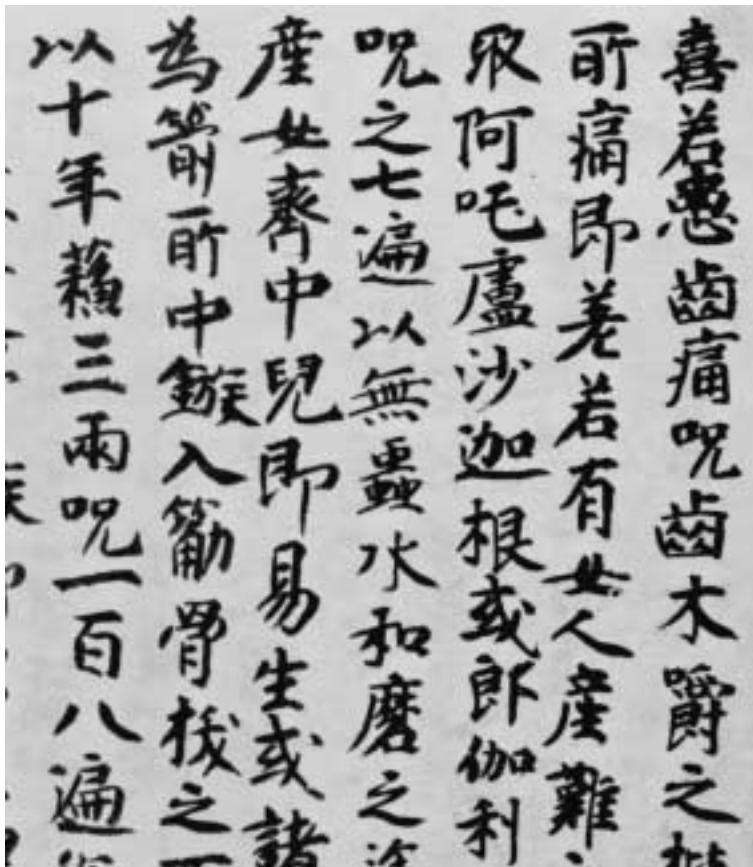
昭和五十年一月二十七日第三種郵便物認可
平成二十年九月二十五日
平成二十年十月一日

(毎月一回一日発行)

書道芸術

第五七〇号

書道藝術



特集：第44回単位認定講習会（岡山）

570'08.10

財團法人
書道藝術院

定武本蘭亭序

三五三年
(東晉・永和九年)

碑法帖拾遺 ⑩

木 雜

伊藤 滋



卷末の游景仁の印



明時代の皇族・朱樞の収藏印
「晋府図書之印」

『蘭亭序』は、このコーナーで『開皇本』と『神龍本』の2種を紹介してきた。今年の夏、北京の故宮博物院所蔵の『馮承素模蘭亭序』が東京で展覧された。『蘭亭序』は真跡が早くから存在せず、数件の臨模本と種々の刻本による拓本が伝えられている。今回は、宋時代の旧拓の『定武本』を示した。『定武本』の名称は、宋代に定武(今河北省定県)より発見されたことにより名づけられた。歐陽詢が臨した書風に近いとされる。ここに示した定

武本は、定武系独特の穏やかで落ちついた筆勢を示す。『神龍本』や『張金界奴本』のもつ抑揚の変化は無いが、静かさの中に伸びやかな躍動感を秘めた書風である。この帖は宋時代の游相・景仁が所蔵した百種の一本であり、明時代には晋府に蔵され、清朝に入り、多くの名家の手を経て明治末から昭和初期に日本に伝えられた。この種の伝来の確かな蘭亭序の拓本は日本に数件伝えられるのみである。

宋人の題記

右迄御碑者追行之題曰定武本知何知本也

清朝の收藏家・梁章鉅の跋文(游景仁所蔵本百種に言及する)

此南宋丞相游景仁所藏百種之一後有印
記可驗舊藏陳伯恭宗丞家 戊子夏日記

東阳

三體

鑒賞

鑒賞

鑒賞

金石錄
卷之三

金石錄

卷之三

熙和九年歲在癸丑暮春之初
于會稽山陰之蘭亭脩禊事
也。羣賢畢，少長咸集此地。
有崇領，茂林脩竹，又有清流激
湍，映帶左右，引以為流觴曲水。
列坐其次，雖無絲竹管弦之

書道芸術院 平成の書(2008)

「尚」



90×90cm



香川倫子

財団法人書道芸術院

理事

書道芸術院は今年で創立61周年を迎えた。61年前といえば戦後の復興期だった昭和22年である。そのとき19歳だった私は、書家になるつもりは全くなかつたが、創立に関わって東京・四谷の私の家によく来られた先生方のことは、はつきり記憶している。その頃の話から書いてみようと思う。

戦時中に疎開するなどして全国に散在していた先生方に声をかけ、書道界を復興させようと20万円を寄付してくださいたのは、千葉県出身の政治家、中村庸一郎氏（書道芸術院・二代会長）だった。当時、四谷の家の近くに女優・入江たか子の屋敷が売りに出されていて、その値段が確か7万円だったから、20万円はかなりの大金だった。それを基金にして香川峰雲は飯島春敬氏や多くの書家と連絡をとり、昭和20年に日本書道美術院を創立した。

しかし、志すところが違っていたのか峰雲は美術院と訣別して、四谷の事務所で上田桑鳩、手島右卿、大沢雅休、大沢竹胎などの諸先生と、よく会議を開いていた。私の仕事は、先生方の食事の支度。物資の乏しい時代だったが、闇市へいけばそれなりの食品は手に入る。新橋へはよく「買い出し」に行つた。ある日、手島先生が「日本酒で墨をすってみた」と仰つたのを聞いて、その奇抜なアイデアに驚いたことも印象に残っている。

一方、母春蘭はおよそ峰雲とは対照的で、家事はすべて私に任せ、一日中机に向かってひたすら書いていた。書に関しては、私が小学校四年生のとき、顔真卿の書を見せて「これを練習しなさい」と言ったことがある。母は内心、私を書家に育てたいと思っていたのかもしれない。

書道に関心のなかつた私が、いつの間にかこの道を歩き始めていたのは、両親の書道界や書に対する情熱に影響されたからだろう。私は黒々と書く母の作品に対抗するように、白を多く残すことに努めるようになった。しかし母の80代の作品が、30年を経た今でも輝いているのを見て、今年80歳になつたばかりの私は、母の世界へ到達するまでには長い道のりが残されていると感じている。

書のひろば

理事長 恩地春洋

院の組織と 毎日展と

暑い夏も過ぎて、すっかり秋らしくなったが、七月の毎日展60回記念展を初めとして院の幹部を中心とする総局・支局の方々の活躍の一部を報告しておきます。

◇毎日展関係
◇関西展 副実行委員長 砂本杏苑
陳列部長 小伏小扇

「会場で、揮毫会や「書を弾く」の特別企画、講演会と多彩な行事。猛暑の京の夏で会員の皆さんは大活躍。

◇四国展 副実行委員長 大野祥雲
四国四県は一致協力の態勢が確立し、大野祥雲さんは、高知県の代表として大任を果たしている。

◇中国展 実行副委員長 小竹石雲
中国地方の中心は広島、作業は殆んど広島在住の方が行うが、小竹石雲さんの誠実さは認められ、信頼を集めている。

◇北陸展 副実行委員長 津田私秋
浜谷芳仙さんの後継として津田私

秋さんの登場、絶大な指導力を持つ芳仙さんの指導のもとに地歩を基いている。

◇東北仙台展 副実行委員長 嵐嶽大拙

副委員長 及川禮助

尾形鼎山さんの後を受けて嵯峨大拙さんの登場、先輩の方々に意見を聞き乍ら、慎重に斬新な企画を実施、万全の人的配置によって、成功をおさめた。

ここは、院が中心となって作業を進める地域だけに他団体への気配りも大へんだと推察される。初心忘れず、大指導者への道を。

〈担当者の例〉

陳列部長 浜田堂光 (補)佐藤無極
副部長 及川豊流 (補)熊谷青山
開会式部長 熊谷宗苑 (補)太田蓮紅
式典委員長 尾形鼎山
講演会 長井四枝 (補)狩野翠桂
揮毫会 副部長 高井俊策 (補)飯沼恵鳳
祝賀会 太田蓮香 (補)木須翠苑

◇毎日現代書巡回展長野展
事務局長 小浜大明
(担当) 上柳佳規

55回展に巡回展を始める。小浜大明さんを中心いて初めて毎日現代書展を催してから五年、すっかり落ちついた巡回展に生長したのも大明さんの人柄による。今回も事務局に回って巡回展を支えた。

「韓天雍と李紅さんの書と琴の演奏」
◇毎日現代書巡回展高知展

実行委員長 大野祥雲
事務局 依岡紫峰

〈成田団〉
団長 板垣洞仙
秘書長 下谷洋子

私の記憶では二度目の巡回展、前回は実質的に運営した大野祥雲さんは、色々企画をふくらませた。

四国四県の協力を得たり、安芸書道美術館の収蔵作品を紹介したり

……。尚、会場内で「前衛書の揮毫」のあったのも高知県で初めて地域に密着した活動を評価したい。

三宅素峰先生の後をまとめて、院の岡山支局長小竹さんは、大活躍中。武政北総実行委員長を担ぎ、事務局として、初めての巡回展を成功させた。

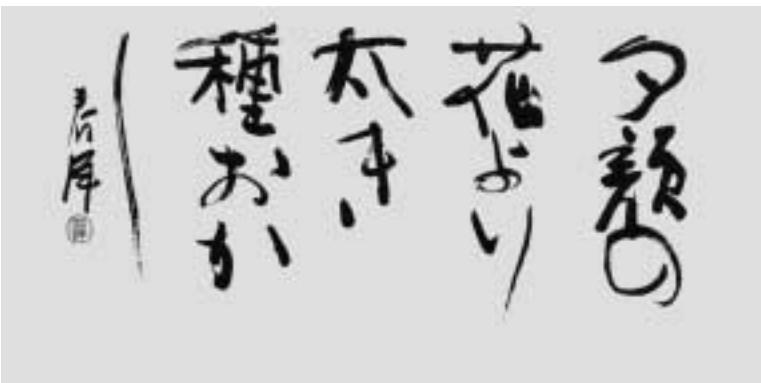
◇毎日現代書岡山展
事務局長 小竹石雲

数年前から奈良展を計画して準備を進めていたが、現代書の展示は始めてで慎重に進めた。奈良の作家を中心に編成して実施。院関係では、高田春来、稻垣小燕さんらが活躍した。

「仙台団」
団長 尾形鼎山
秘書長 嵐嶽大拙
尾形鼎山ら24名
白石和楓ら35名
白石和楓ら35名
秘書長 小林琴水
今村青華ら30名
〈関西団〉
団長 小竹石雲
秘書長 小林琴水
今村青華ら30名

院から訪台団91名
現代日本の書代表作家台北展に、本邦から91名が参加、訪台する。

総團長 総秘書長 辻元 大雲
総秘書長 辻元 大雲



<恩地春洋書展より>

現代詩文書 (一)



尾形澄神書 44×86cm

「蝶と風落花と風のある中に 稲畑汀子句」句意を頭の中でイメージしていたら、自然とこのような構成になった。この作品をきっかけに、余白という意識するようになった。

方、墨量の含ませ方等基本的なことに始まり、直筆と側筆の使い分け、起筆・送筆・終筆それぞれの変化のつけ方、直線と曲線の引き方、潤筆の出し方と開いた筆の閉じ方、筆の弾力を生かした筆圧の加え方と緩急のリズム、墨絶ぎのタイミングとその含量、逆入平出や府仰法の使い方など、用筆法は多岐にわたっています。

「書は筆意の芸術である」という思いが私の中にはあります。筆意とは運筆に表れる書き手の心の動きです。筆意が豊かな作品は、詩情も豊かです。豊かな筆意を表すためには、用筆法を理解しなければなりません。用筆とは筆の使い方、つまり筆遣いです。筆の持つ位置、持ち

これらの用筆法を習得するためには、古典を学ぶ以外に道はありません。古典は用筆の宝庫です。古典を学ぶということは、用筆を学ぶということです。

21世紀の書 —私の主張—

漢字 (一)



2003年の白扇展で雲峰賞を受賞し、翌年最高賞作家ミニ作品展（銀座鳩居堂）に出品する機会をいただきました。

作品は大きさが半紙二分の一、老子の句で「一を抱く」です。

私はいつでもスタートラインに立て、新鮮な気持ちで作品を創ることが大切だと思っています。新しい作品を創り出すためには、一步前に踏み出すことが必要です。

私の一番の感動は子供の誕生です。胎毛筆から生命力を感じ、私にとってとても大切な筆になっております。

私の力不足を補うために、この筆に力を借りして書いた次第でござります。

今月から6回お付き合いをお願いいたします。

ことばと筆にちょっとこだわりをもつて書きました。

ことばは、日頃思っている「始めた

時の気持ちを忘れちゃいけない」とい

うことを表現しようと選び、筆は、胎

毛筆（長男の髪）で「作品に命を授け

てみよう」という思いで使ってみました。

私はいつでもスタートラインに立つ

て、新鮮な気持ちで作品を創ることが

大切だと思っています。新しい作品を

創り出すためには、一步前に踏み出す

ことが必要です。

第20回最高賞作家
ミニ作品展出品

大内熒軒書

平成20年度 新審査会員作品

II

大原律子（漢）・栗原信子（か）・嶋田麗雲（現）・上野鈴子（前）



大原
律子
(高知)

「花」



このたび審査会員に昇格させていただき誠にありがとうございます。長年ご指導してくださっている大野祥雲先生のお陰と深く感謝しております。(臨書から創作)へと先生の言葉をいつも胸にこれからも努力したいと思います。

(律子)



嶋田麗雲
(京都)

「睡蓮の花」

古代エジプトでは太陽のシンボルであったという睡蓮、花言葉は「信仰・優しさ・純白」私も、作品に対峙する時は清らかな真白な心で臨み、我が書人生の睡蓮である師・砂本杏花先生に近づく事を目標にして、日々精進しております。

(麗雲)



上野鈴子
(青森)

「生」

振り返ると悪戦苦闘の連続でした。

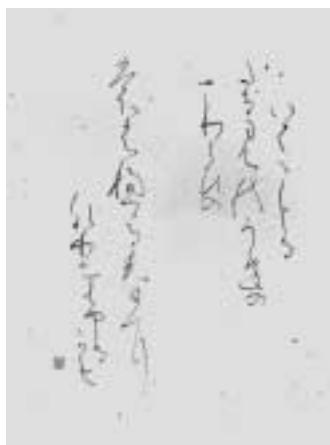
それでも過去概念にとらわれない前衛書としての自由な創作の喜び。この喜びの為、今後も、今与えられている「生」に感謝しつつ、精一杯生きる為、「生」としました。

(鈴子)



栗原信子
(東京)

「石ばしる垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりにけるかも」
万葉集



これまで万葉集や古今集等いろいろの詩歌を書いてきました。その中で一つを選び出すのは難しいことです。万葉集の志貴皇子の「懽びの御歌」は私の心に残っています。これを機に、さらに下谷先生はじめ諸先生のご指導をいただき精進してまいりたいと思います。

(信子)



嶋田麗雲
(京都)

第44回 書道芸術院単位認定講習会（岡山）

会場＝岡山県倉敷市鷺羽ハイランドホテル

会期＝平成20年8月23日（土）～24日（日）

主管＝山陽支局（支局長 小竹 石雲）

報告 小竹 石雲

瀬戸内海国立公園の鷺羽ハイランドホテルを会場にして恒例の書道芸術院の単位認定講習会が開催された。山陽支局での開催は16年ぶりで、参加者は講師・助講師・役員を含め17名。

事前の打ち合せ会議では、受講者の方々が気持ちよく受講できる雰囲気作りを第一としてスタッフ一同誠心誠意頑張ろうと誓いを新たにした。

開講式では恩地春洋理事長が、「所属以外の内容を、実技を通して学習することにより他部の活動を理解し、資質を高めてほしい」とのごあいさつをされた。

トップは院史

講師＝恩地春洋先生、助講師＝前田龍雲先生

加藤翠柳先生の作品を中心として、秋季展作品もプロゼクターを使って説明。大沢雅休、竹胎などから何をどう受け継ぎ、またお弟子さんたちは、翠柳先生から何をどう学んだかを、作品を通して詳細に説明がなされた。

継承には工夫が必要。時代の風を入れていくことが大切。との興味津々の講義であった。



恩地春洋理事長あいさつ



〈院史〉恩地春洋先生講義



〈原拓書道史〉



辻元大雲先生講義

全拓で見えるので一番です。全体をつかむ絶好の機会。広げるたびに拓は切れ破損も進むのに、我々受講者のためにとのご厚意に感謝。

辻元先生所蔵の瓦当の拓が懇親会の席で抽選によりいただけること、感激の拍手。

刻字のテーマは「花」一字を刻る

(陰刻)

講師＝小山鳳来先生、助講師＝瓶子紅雨先生、三宅梵先生



〈刻字〉 小山鳳来先生

初体験でも立派な作品に仕上がり大満足。宝物が一つ増えた喜びを感じられた。

刻字の魅力は書くことに加え刻ることにある。その刻る時間が多くなるようになると事前に、先生がすぐ刻れるまでにラベルシールを貼りこんでくださっていた。彫刻刀の使い方はプロゼクターを使って説明があり、先生はいつも簡単に刻られて、これなら自分でも思ってやったが、なかなか思い通りには刻れない。助講師の先生方が懇切丁寧にご指導くださる様子を見、受講生は俄然張切っていた。精一杯頑張ったが完成まで至らなかつた人のために、講師、助講師の先生方は運くまで孤軍奮闘。



熱心に刻する受講生

「前衛書の作り方」
講師＝千葉蒼玄先生、助講師＝工藤永翠先生



古典の臨書することで、様々な線や形を象徴的にとらえ表現する方法を実際に見聞きでき、楽しかった。初心者に

はなかなか理解しがたいものがあったが、新鮮に感じられた。講師、助講師の超長鋒を使っての熱氣溢れる模範揮

〈前衛書〉



千葉蒼玄先生揮毫

語り合う受講生



〈漢字〉 浜田尚川先生講義

臺は、一瞬の出来事で幻想の世界に陶酔した心地で、その醉い醒めあらぬ間にと受講生は真剣に筆を走らせていた。初日最後の講座漢字のテーマは「鄭



工藤永翠先生揮毫

義下碑から学ぶ

講師＝浜田尚川先生、助講師＝三谷嶺

雲先生

天来、尚亭、右卿、桑鳩が臨書した
鄭羲下碑を追体験した後に原本を見て
臨書した。鄭羲下碑の持つ特徴を講師
の浜田尚川先生が実際に筆を執って熱っ
だく。



浜田尚川先生揮毫



へ 懇 親 会 へ



石井明子先生揮毫

業者から頂いた景品が続々と受講者の手に渡り、笑いの渦。明日への活力となつた。
二日目はかな「自分のリズムをつかんでかなを書こう」



大 当 り !!

講師＝石井明子先生、助講師＝平川峰

子先生

石井先生のお言葉で印象に残ったのは、書の楽しさは色々あるが、「一人歩きの楽しさ。」先生の体験されたこ

と「リズムに乗れて、

作品になつた」今回の

テーマでもあります。

「繰り返して書かない

とリズムは生まれてこ

ない。」一朝一夕に出

来るものではないが、

あきらめず地道にする

勉強が大切なようです。

一枚と時間ギリギリま

で紙と格闘していた。



〈かな〉 石井明子先生講義

現代詩文書「詩心を求める」

講師＝坂本素雪先生、助講師＝熊谷宗苑先生

「最も重要な事は、物に感動する心を失わないことである。」

津軽弁のローカル色豊かな語りは受講者を笑いの渦に誘い、受講者をリラックスさせ筆を執らせる技は天下一品。講師、助講師の先生方の横範揮毫は大空を長峰が舞つてるように楽しい一時でした。

〈備前焼〉



坂本素雪先生講義

上西節雄先生



地元講師の上西節雄先生からは、「備前焼を学ぶ、見る・楽しむ」というタイトルで、備前の歴史的な名品をスライドで拝見。



坂本素雪先生揮毫

認定書授与



熊谷宗苑先生揮毫



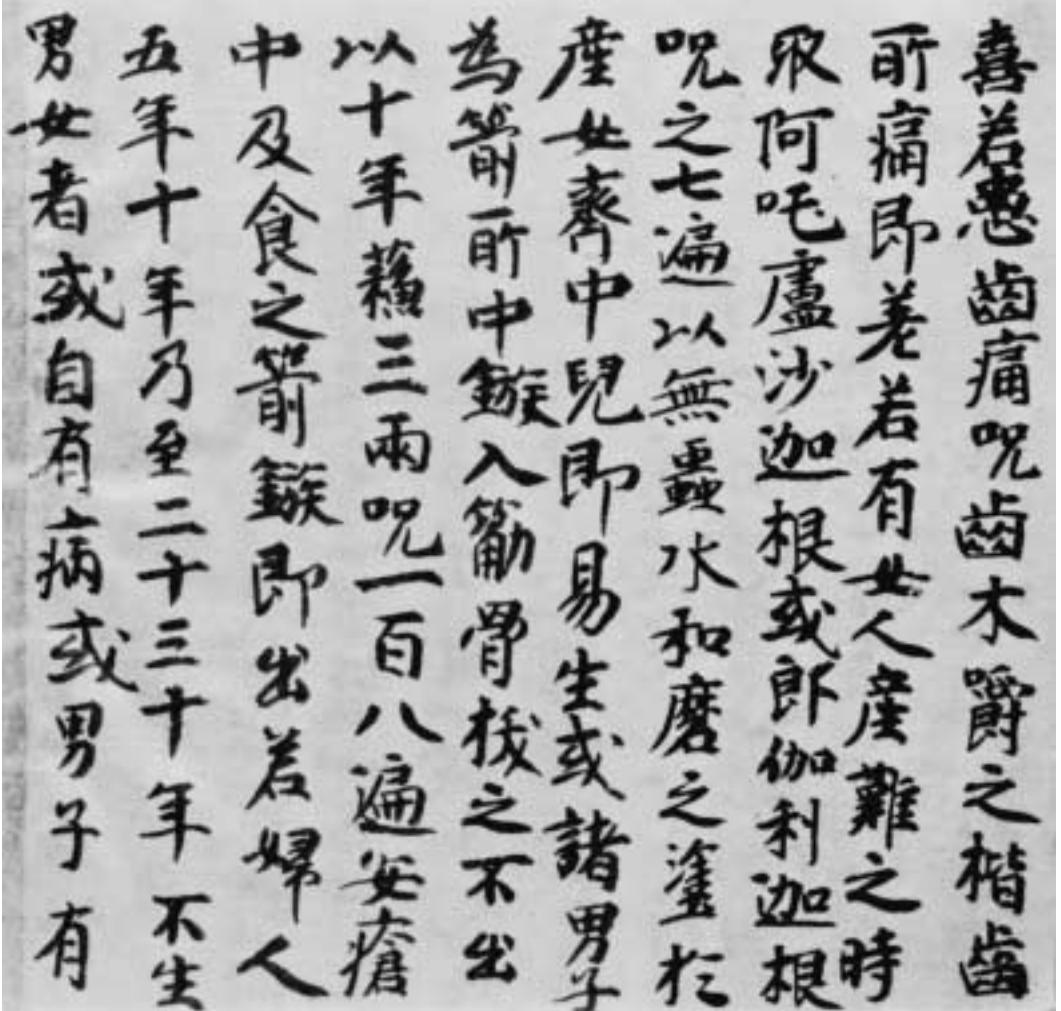
〈瀬戸大橋〉

次年度は南関東総局で開催
(板垣洞仙總局長)



謝 辞

閉講式では、認定証の授与、謝辞、恩地春洋理事長の講評、来年は南関東総局長板垣洞仙先生と握手をかわし無事二日間の日程を終了した。



解説

三十帖策子の第二十九帖は大方広善薩藏經中文殊師利根本一字陀羅尼法を書いたものである。三十帖策子は空海が在唐中（八〇四一八〇六）に書写した密教の經論・儀軌・真言などの秘籍二十帖である。初め三十八帖あつたことは空海自筆の策子目録によつて明らかであるが、八帖なくなり、三十帖残つてゐたので三十帖策子といわれている。策子は冊子である。現存の冊子本のうち三十帖策子は最も古い本である。

三十帖策子は粘葉表で、古代紫の絹の表紙をかけてゐる。その表紙は一枚で、本紙の二倍より大きい。そして、表紙は本紙を覆い包む。この表紙には巻子本の表紙のように紐が付いていて、それで本を巻くようになつてゐる。

用紙 半紙普通判
||注||漢字研究部競書作品は、
上の法帖の中から何文字臨書してもよい。
(掲載部分以外は不可)※落款を必ず入れる
署名、もしくは
○○臨
(押印のみも可)

喜。若患齒痛。呪齒木嚼之。楷（楷）齒
所痛即差。若有女人產難之時。
取阿吒盧沙迦根或郎伽利迦根。

呪之七遍。以無蟲水和磨（摩）之。塗於
產女齋（臍）中。兒即易生。或諸男子。

爲箭所中。鎌入筋骨。拔之不出。

以十年蘇三兩呪一百八遍。安瘡
中及食之。箭鎌即出。若婦人
五年十年乃至二三十年不生
男女者。或自有病。或男子有

以十年蘿三兩呪一百八遍安瘡
中及食之箭鎌即出。若婦人
五年十年乃至二三十年不生
男女者。或自有病。或男子有

以十年蘿三兩呪一百八遍安瘡
中及食之箭鎌即出。若婦人
五年十年乃至二三十年不生
男女者。或自有病。或男子有

<よみ>

為妹吾拾奥邊有玉縁將來奧津白浪

朝霧尔沾ハタハタ不之衣不干而一哉君之山道將越毛可多
いもがためわれたまひろふおきつなる
多末毛
たまもちよせよおきつしらなみ利爾
あさぎりにぬれにしころもほさずして
利
ひとりやきみがやまとこゆらむ

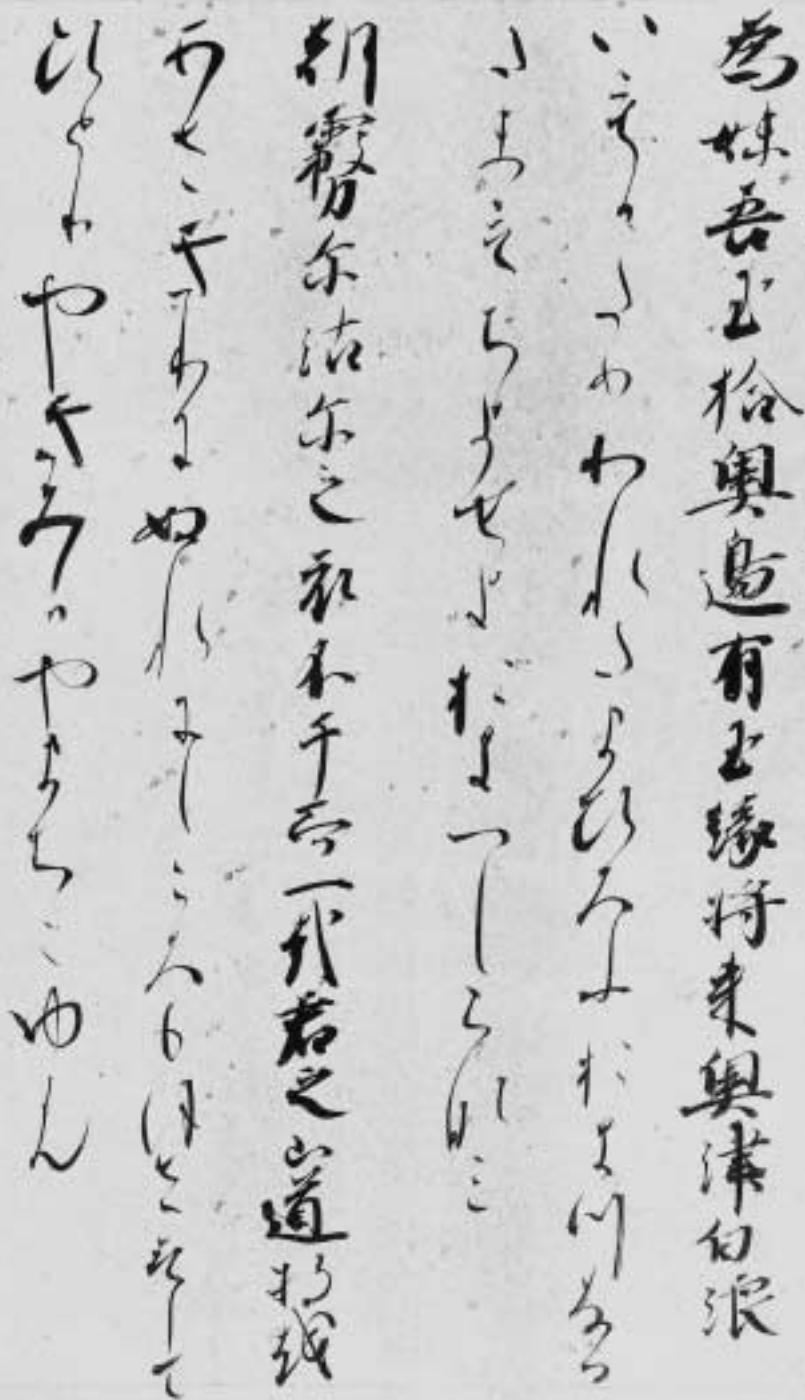
〔解説〕藍の染めに、あらく銀砂子を撒いた料紙が用いられているため、この名で呼ばれる。佐佐木信綱が命名した。（古筆家の間に藍地万葉集と称してをったので、新たに藍紙本と名づける）佐佐木信綱著『国文学の文献学研究』より抜粋）

編集部

〔料紙可〕

※左記の掲載
歌一首以上を書く
(全臨も可)
用紙・半紙普通判

※落款を必ず入れる。
署名もしくは〇〇臨
(押印のみも可)



習い方解説 (一)

西林乘宣

新月始澄秋
(新月始めて秋に澄む)

「秋に入りて、三日月が始めて
きらきらと鎌のごとくに見える」
『墨場必携』秋類五字の中から。



書体=自由

「半紙」は初めてです。条幅では
篆・隸・楷・行・草と五体に挑戦
してもらいましたが、今回も同じ
です。それというのも、有段者と
もなると、色々と書けなければい
けないからです。
さて、篆書は呉昌碩のような篆
書と謙慎や創玄の方たちが書く篆
書とに大別されます。基本を勉強
していただき意味で、今回は前者
をとりました。起筆と終筆にご注
意。特に終筆のさらにその先まで
目が行くようになれば実力者。

新月始澄秋 よみ(新月始めて秋に澄む)

習い方解説（一）

依岡紫峰

大器晩成
(たいきばんせい)

大きなれものは、簡単に完成しない。人間もまた、大人物は才能が全開して表れるは遅い。徐々に大成する。

この頃の人づくりは、目先の成果を追いすぎているのではないかと氣にかかる。

今回より六回を担当させていただきます。

課題の読み、文意概要の理解してから練習していただこうと思っています。そのために、馴じみのあることばを選びました。

「大器晩成」筆鋒をきかせて書いてみました。明るくのびやかな作品を心がけましょう。



かな規定 初段以上【十一月二十日締めき】用紙 半紙普通判（料紙可） 山藤美知子選書

習い方解説 (一)

山藤 美知子

み空より雲層ぐだりて秋ぐさの
花野にわたる風のくまなさ
(中村憲吉)

近代短歌をえらびました。変体
がなを少なめにして、明るい作品
にとの思いです。

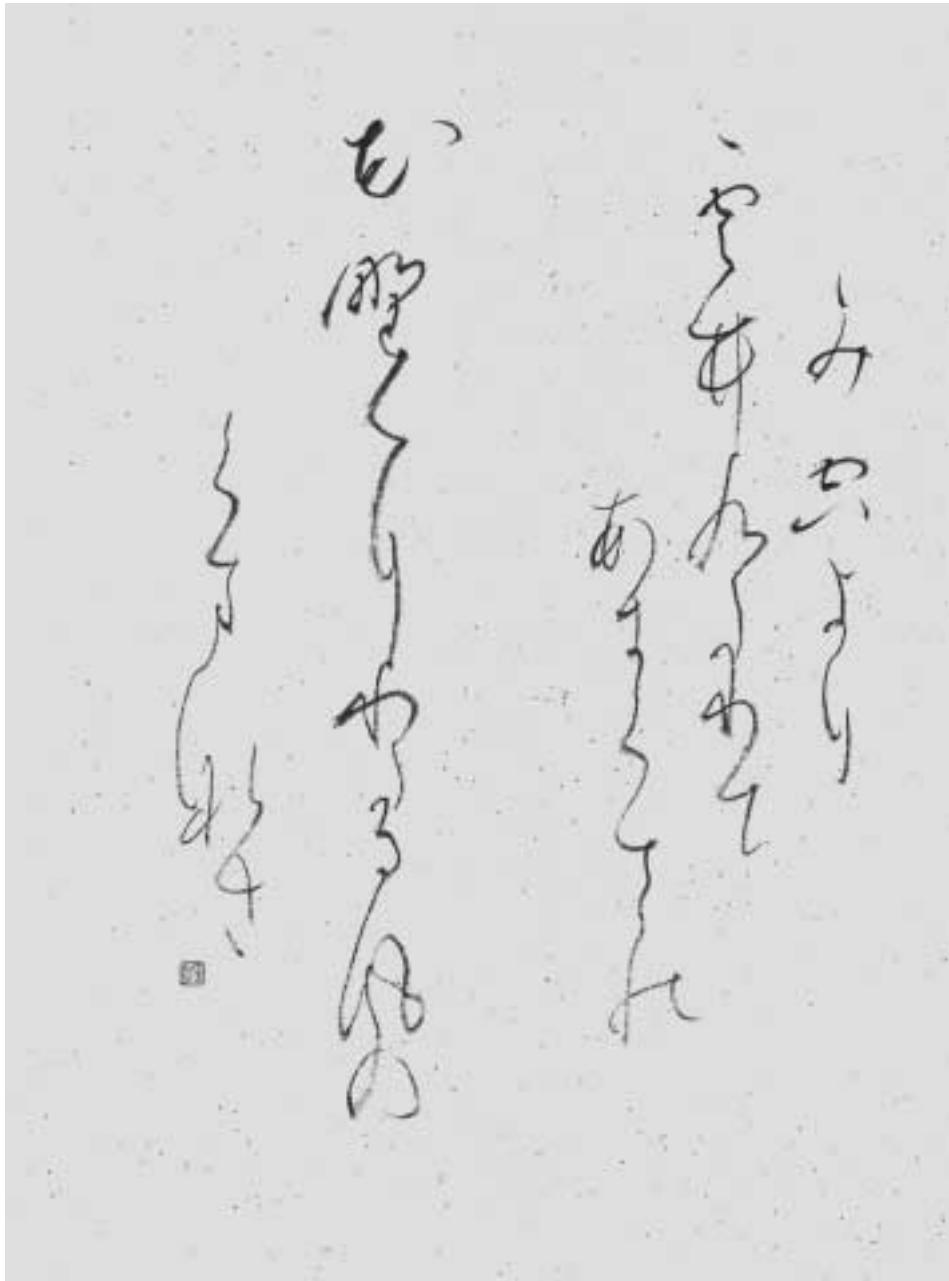
平明な手法の五行書きです。行
頭行尾を変えて行の長短をつけ、
バランスよく余白をつくります。
かなの散らし書きは余白と墨量
の変化（潤筆と渴筆）、線の太細
で決まります。

行間の変化に注意し「花野にわ
たる風の」と大きく展開させて、
ゆったりとふところ広い作品に仕
上げてください。
筆はいたち面相を半分位おろし、
直筆で峰先をよくきかせて、書い
てください。

よみ方 み空より雲る(井)く(九)だ(多)り(利)てあき(支)くさの(能)

花野に(耳)わた(多)る風のく(久)ま(万)な(那)さ

創作

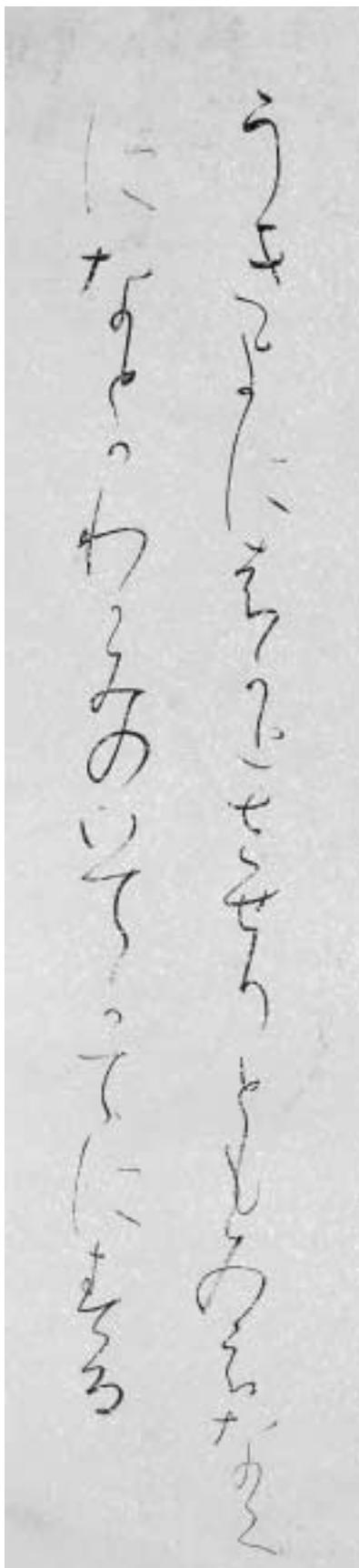


かな規定 秀級以下【十一月二十日締めきり】用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

高野切第三種

(掲載写真縮小93%)

掲載写真のうたを全體、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。



よみ方 うきよには(者)か(可)どさせりともみえなく
になどか(可)わが(可)みのいでか(可)てにす(春)る

かな条幅規定【十一月二十日締めきり】用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

朝倉春江選書

習い方解説 (一)

朝倉春江

ながらふる月の光に照らされし
わが足もとの秋ぐさのはな

(斎藤 茂吉)

行頭は、少しつまり加減に、行
の中程から脚部にかけては、運腕
大きく大胆に。二行目は墨量を減
らして、しなやかに、力強く書き

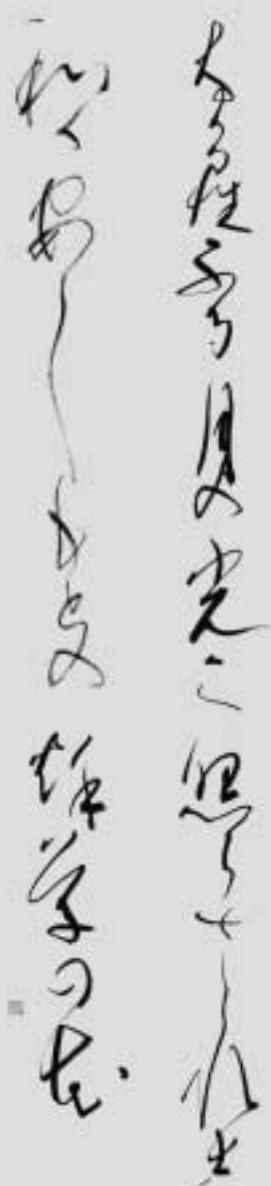
ましよう。腕を前に出して書くの
ではなく身体全体の重みを筆に預
けて集中して書きましょう。部分
練習は充分に。

*たて形式に限る

よみ方 なが(可)ら(羅)ふる月の光に(一)照らされし(志)

わ(和)が(可)あ(安)しもとの秋草の花

創作



習い方解説 (一)

小林琴水



閑雲潭影日悠悠
物換星移度幾秋
(閑雲潭影 日に悠悠 物換わり星移つて幾秋をかたむる)

書体=自由

秋の情景の句です。光景が目に浮かびます。ゆっくりと筆をおろし、動きを出していく。扁とつくりの傾むきをよく見て、字形のバランスをとってください。



漢字条幅規定 秀級以下 [十一月二十日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

一谷春窓選書

習い方解説 (一)

一谷春窓

物静かにして、がさつかぬ人は、
その心が自ずから玄妙である。
顔法ですが感鋒で十分筆圧の加わった剛健で向勢の字からは温かみを感じます。今学んでいる古典を参考に自己表現により創作してください。真剣に書と向き合う姿勢が枚数を重ねることにより、よい作品が生まれ出ることでしょう。

書体=自由

静者心自妙
(静者心自から妙なり)

習い方解説 (一)

安齋映心

神様がたつた一度だけ
この腕を動かして下さる
したら母の肩をたたかせて
もうおう

「花によせて」より 涼枝書

用紙=はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体=自由

人生の出会いのなかで忘れえぬ人が
あるように、たった一冊の本でも、長く
心に染みて忘れられないものがあり
ます。星野富弘さんの詩画集「風の旅」
もそんな本のひとつです。星野さんは、
昭和45年春に念願の体育教師になり、
模範演技中に誤って墜落し、以後は首
から下の自由を失いました。長い闘病
生活ののち、口で詩や花画を描きはじ
めたことは、皆さんよくご存じのこと
でしょう。これからこの詩文を参照し
て、ペン字を学んでいきたいと思いま
す。

実用書は行書が一般的で、漢字より
仮名を小さめに書きましょう。調和の
よい自然な美しさが味わえます。行の
中心がゆれないこと、字粒、字の幅、
字間、行間などのバランスを参考にし
て書いてください。何度も練習してリ
ズムが出るようにしたいのですね。

*落款を入れ忘れないようにしてくだ
さい。(落款は自分の名前を入れて
ください。)

今月の

ホープ作品
各部総評 No.567

漢字部 師範 浪川 秋花
切れ味のよい筆致で爽やかな木
簡風で表現。やや小粒にまとめ余
白を生かした作。落款もお洒落。
◎漢字部総評 上級は隸書表現多
かったが基本用筆の難ある作散見。
下級の楷書と共に基礎的な技術と
して身につけたい。（大雲評）



かな条幅部 師範 吉田 佑子
透明感のある墨色が美しく、街
いなくリズムが走り爽やかです。
二行目渴筆やや物足りなくも。
◎かな条幅部総評 オリジナルは
かなの字組みや連続法をつかんで
からにしましょう。清水を清みづ
とは書きません！（洋子評）



漢字条幅部 師範 加藤 紫翠
坦々と筆を運んで明るく澄み切つ
た心境を伺わせる。書に対する姿
勢がよい。



◎漢字条幅部総評 自分の気持ち
を大切に書として表現することは
技術の上手下手にかかわらず、絶
えず心がけたいこと。（春洋評）



前衛書部 特選 菊田 杏仙

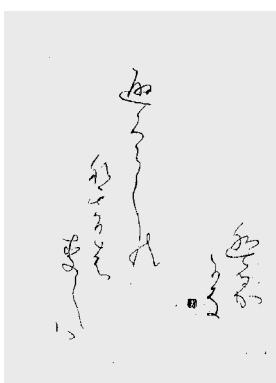
鋭い線質と余白がみごと。潤渴・
流れも巧みに表現され、明るい直
曲の和の妙作である。

◎前衛書部総評 今回は余白を生
かした表現の明るい作が多かった
が、迫力の作が少ない。（洞仙評）



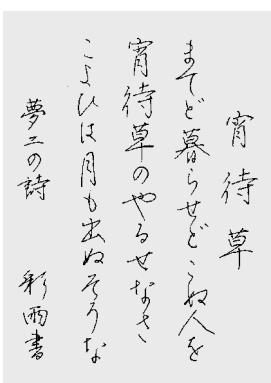
現代詩文書部 特選 春日 裕

墨線の黒と、余白の白のコント
ラストが大変見事。しっかりとし
た構成の中に品位と格調が光る。
◎現代詩文書部総評 全体的に線
に動きある作が多いことは良好だ
が走りすぎの感あり。（舟雲評）

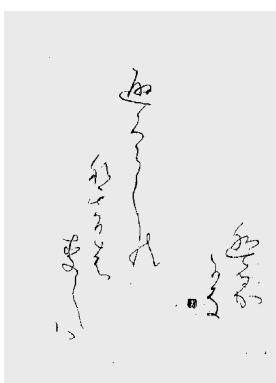


かな部 師範 川口美智江

大胆な構成を、繊細なタッチで
表現して美しい。変化が過剰でな
く老練の品性が漂って見事です。
◎かな部総評 字の大きさに迷い
が多く残念。雅印はかなに相応の
物を使用し、印泥で作品を汚さぬ
よう細やかな配慮を。（明子評）



ペン字部 師範 吉瀬 彩雨
伸びやかでいて強さを持った線
は柔らかくまた深さもある。名前
まで一貫した秀作である。
◎ペン字部総評 行書を意識しす
ぎたためか字形に無理のあるもの
が多かった。単体の形をよく見て
学習することが大切。（蒼玄評）



今月の

特別研究部 優秀作品（特選）



熊谷青山書

現代詩文書

（蒼原）熊谷青山

「大原や」

◆潤渴のバランスよく、特に渴筆の動きがリズムを生み出して妙。明るく爽やかな作だが、終末から落款や寂しさを感じたがそれも意図的なのか。（大雲評）

◆走るような筆の動きに思わず見ている私もリズム的に体が動く感。後半少々弱い表現になってきて淋しさを感じたがそれも意図的なのか。（倫子評）

◆理にかなった構成で、作品映えしている。細線や渴筆がリズミカルでそこに強弱が表れて技術的にもかなり秀でている。落款一考を。

（洋子評）



大隅晃弘刻

篆刻
(千葉)

大隅晃弘
「拙奴」

（原寸大）

◆二字組み合わせだが下の奴の字の方が面白く上の拙が重い感がする。長い立て線に動きが生ずるとこの小さな中に変化が出来て来るのでは。（倫子評）

◆やや「拙」が均等すぎて重く見えるが、全体では白の配分にセンスを窺わせ目を引く。縁の極端なバランス感覚も新鮮に映る。（洋子評）

◆左方の縁を大胆にカットして右下部との対比を明確に見せる。拙の縦画がやや混みすぎて、奴の余白とのバランスが悪くなつたか。（春洋評）

総評

「黒は色である」こう題した展覧会に、ルオーとマティスの二人は作品を出品した。マティスは光を表すためにルオーは人間の深奥を表すために、印象派によって否定されてきた黒を用いた。我々は黒という墨色に常に捕らわれているが、画家は色に対しても何と自由なことだろう。マティスは黒を支配することで画面の明るさを際だたせた。ルオーは黒とのコントラストによって人間の内面を表そうとした。私たち書家は黒によって何を表現したいのだろうか。

74点（漢14、か5、現34、前18、篆3）
秋季公募も昨年より減、意欲的に黒を発表することを期待する。

（蒼原）

漢	惠雅	白珠	工藤	雅邦
墨宣	大川	永翠	代香	
八幡	馬場	寿仙		
書泉	岩崎	竹溪		
卯月	栗原	信子		
もく	西川	藤象		
東実	吉田	真理		
蓮紅	伊藤	有津		
一條	紅蕭			
青蓮				
矢野				
弥生				

（特選候補者）

現代詩文書

(大雲) 長島 僊雨
「坂村真民の詩」



長島 僮雨書

◆漢字に比べてかなが弱いようと思うが、動きが大きく大らかに突き抜ける感が頗もしい。行間にもう少し配慮して丁寧な作品創りを願う。(洋子評)

◆詩文書は文章を読んで鑑賞する。最後は余韻を持って終りたい。大きい紙に大きな動きで痛快だったろうが最後はぐっと気持ちをおさえたい。(春洋評)

◆大きな動きで懐の広い作。前後の潤筆の豊かさに対し中央の破筆がやや単調な感あり、筆先のからみがあれば更に変化するのではないか。(大雲評)

◆漢字に比べてかなが弱いよう思うが、動きが大きくて終りたい。大きい紙に大きな動きで痛快だったろうが最後はぐっと気持ちをおさえたい。(洋子評)

◆漢字に比べてかなが弱いよう思うが、動きが大きくて終りたい。大きい紙に大きな動きで痛快だったろうが最後はぐっと気持ちをおさえたい。(洋子評)

前衛書

(山王) 鈴木 春江
「川開き」



鈴木 春江書

◆独特的雰囲気を持つ楽しい作。大小潤滑の変化にリズムがあり、漢字作品の新しい方向を探る作。線質や軽すぎるため粗末にも見える。(大雲評)

◆書き始めと終りとの余白の取り方にバランスをくずした感残念、唯さぞ楽しく口ずさんで書いていたのであろう見ている私にも伝わる。(洋子評)

◆一字一字を拙美とし、一見詩文書のようなまとめ方で、前衛的漢字作品となる。墨色や結体で意表を突くが、やや飄々としすぎかと……。(洋子評)

◆墨の濃淡、文字の大小など集団の美をねらった絵画的な作品、よく見れば文字造形は無理な知的作業自然な形の変化まで書き込んで。(春洋評)

(春洋評)

漢字

(水塗) 伊澤香雨
「杜甫 秋興四首」



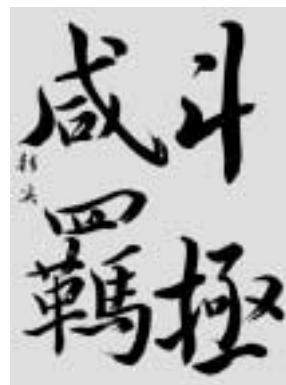
伊澤香雨書

◆リズムが転がるように広がり、思わず口づさみたくなる風情が楽しい。線は少々単純だが、感覚に何か新鮮なものを見せて次回作も期待！(洋子評)

◆リズムが転がるように広がり、思わず口づさみたくなる風情が楽しい。線は少々単純だが、感覚に何か新鮮なものを見せて次回作も期待！(洋子評)

選評 小伏小扇

今月のホープ作品



上路 彩炎

◎漢字研究部総評

静かでつしみ深い作品です。原帖の用筆
筆鋒の動きや結体の妙、空間のとり方を見事
にマスターしておられます。
墨色の美しさが一層の光彩を与えていています。

漢字研究部 特選 上路 彩炎

研究科出品がこんなに多いのに驚きました。
原帖は多くの方に親しまれている古典ですが、
寧に原帖を観、反覆練習することです。筆の
運筆が粗雑な作品がかなりありました。まず
筆意がどこに働いているかに注意しながら丁
寧に原帖を観、反覆練習することです。筆の
開閉や抑揚、運筆の速さや筆圧を加減して、
リズムをつけたり変化を出したりしています。

西旆	樂華	咸	斗
條支	曾舉	羈	極
禮葉	沙場		
旁垂	磬翁		
池東	禮葉旁	旌若木	龍鄉委
傍磬翁	垂沙場	西旆條	責鳥服
旁垂沙	旌若木	斗	樂華曾舉
傍磬翁	沙場	羈	禮葉旁垂
樂華曾	沙場	沙	沙場磬翁
舉禮葉	沙場	場	沙場磬翁
龍鄉	沙場	咸	龜浮沼
咸羈極	沙場	羈	應龍在
斗	咸	斗	龜浮沼
咸羈極	咸	羈	應龍在
斗	斗	極	龜浮沼
咸羈極	咸	羈	應龍在

千洋楠光 時みつ
恵子子麗春子え

弘澄眞恵節幸
美子理萩苑子

秀靜翠春美桂
苑子徑峰子苑

喜直子
久子浩
花喜子
泉久子
峰子浩

かな研究部
(和泉式部続集切上巻切)

選評 朝倉春江

今月のホープ作品



美和優
知
子敬子

古紅幸
塘霞苑

初嵐笑
香泉華

恵
み
ど
佑
葉

岡部照芳

◎かな研究部総評

直線の動きを見逃がさず、激しい筆圧の変化によって太細に大きな落差のあることや、筆圧の変化で生まれる動きの美しさへ理解不足の作品が多くなった。

大華生八大高
雲祥大街雲祥秀
磯安新熟朝青木江志
清華廣紅爽理耀
京澄秀石千大稻も澄も秀
吉山柳三松松細橋西浪戸寺高泉鶴社鳥渋波後黒熊菊加小大字薄牛犬伊
祐幽政敏愛翠白貴都藤秋悦悟花龍史菊三麻恵喜善竹谷善龍萩喜星春美道則
秀高北蓮己澄大土千蒼秀大竜藤紅声大樹石八東艸竜若生英大広千大華大軸A
青會遅吉遊山森森宮松増堀平平林花德土高鈴神社佐佐佐齊後工君吉岸川神金加梶貝小生内植岩岩伊石石飯安新東秋
か勇介四紅美龍睦幸藍華幸優彩雙智萩つ昌合智香萩咲代町節綱良山春彩萩南雲萩雅絃窓江美皓洋郁寿知正紫楊藤花久
館椿詢調大東高広詢大帝調幕彩竜鬼梓艸春秀N正青広安泉春生福も千詢上高こ土英紳澄大竜千生大遊大こ青千椿素松
小小小小木熊工久木木北岸木神川亀葉門加加鹿香小小冲小岡大大大梅臼上植宇岩岩今猪石生池池五飯飯安浅淺阿
笙晃澄雅芳さ昭美紫香良等淳恵志典茱紫悦信真良裕富久西和雅真藤幸惠淑久虹綾妃如楠美恵貴理さ萩尚秋佳風雪子
声青帝高前椿英声艸五大高書春正秀大澄大東椿詢土遊調泉艸大秀泉大英椿秀高大紅安英正大春明一八弘千炎英竜澄
選香峰塚陵橋翠峰香玄葉阪陵径寿華水雲春阪向翠扇氣雲布会玄阪峰翠水陵阪羅波峰華雲汀漢弦生舟葉佳峰春峰
外172米吉横山八百村村村真松前前堀星福深比富橋野野西新永中富富田田竹高高角須鈴鉢菅生下志崎波篠鹿紫佐佐櫻齋
名倉田井木不山田田庭本花田野島川堀田山本村崎澤溝岡田澤田澤野中中森橋野倉田木木谷田村谷田内雲藤田藤
氏名聲光正明順代龍玲珠ヶ陽麗幸津佐歌和清代芝日陽愛瑞彩美時雅萩惠可美蒼弓初章育香や多悦彩代抱称董美洋煌華桂龍翠早
略香治江子子峰香風ミ秋子子子枝子香洗子香和詞菜美峰子子彩子三枝子子江治子舟子美子舟子舟子江子煌月炎香貞香苗

かな研究部成績表

かな研究部 特選 岡部 照芳

佳作(60篇)

佳

作

60篇

第60回全国学生書道展記念事業

平成20年8月1日(金)
～
8月3日(日)

「台湾見学の旅」報告

団長 恩地 春洋
准大賞、記念賞受賞者、団体優勝校・
塾代表者を対象に台湾見学の旅が実施
された。同行者を含め総勢40名の訪台
団である。詳しい報告内容は副団長以
下団員の方々にお願いしたので、ここ
では団員の名前のみ紹介しておきます。

〈役員・委員〉

団長 恩地春洋

副団長 小伏小扇 (実行委員長)

相談役 小伏竹村

秘書長 千葉蒼玄

医師 中村 宏

相談役 倉林智子

*有路千悠 金井良樹 佐久間歩 嶋

田千寛 田代咲 田中順子 都丸希美

藤崎量子 村上理子 目良聰衣 芳野

直子 編貫智子 (以上入賞者) 石井禮

子 佐久間京子 嶋田有希 田代紀子

藤崎啓子 芳野通子 (以上同行者)

〈第2班〉 *は班長

*一森亞耶奈 五藤真世 有賀美来

石川晋太郎 宇田川春香 岡田匡美

小野梓 竹村知夏 堀尾有貴 本間

香澄 (以上入賞者) 石川佳美 宇田

川美恵 越智義夫 菊池昌春 本間

彩香 (以上同行者)

〈役員報告〉

○副団長 小伏小扇 (実行委員長)

「台湾見学の旅」

7月31日—表彰式後、上野精養軒にて結団式。そして貸切バスで成田ビューホテルへ。ホテル到着後、揮毫会のリハーサルを行った。半切二分の一に思い思いの文字を書き、押印の練習もしました。この日は全員早目の就寝。

8月1日—9時20分発の全日空で台湾・台北へ。3時間30分のフライトだが、時差があり、日本より1時間遅い。

台北空港到着後、専用バスで市内観光はじめは龍山寺へ。次に台湾民主祈念館を見学し、それぞれで集合写真を撮つたが、暑くて暑くてたまらない。夕食

後、士林夜市の見学に出かけた。想像を絶する人の波と活気に圧倒される。

8月2日—専用バスで忠烈祠へ。バスの停車場所がない位、多くのバスが既に到着していた。猛暑の中、キビキビとした兵士の行進に目を奪われた。

今回のハイライトである台湾科学教育館に早目に着いたが、台湾側の関係者や、謝会長もすでに会場で準備しておられた。「台湾学生と日本全国学生友

好揮毫大会」は、吹抜けで周囲から観覧出来る広いロビーで開催され大盛況であった。子供たちの無限の可能性に

感じ入った瞬間だった。同会場地下1階で行われた昼食交流会は、各テーブルごとに、学生を考慮した混成メンバーを組んでおり、子供たちはすぐに意気投合した。写真を撮り合い、メールの交換をして友好を深めていた。交流後、会場を後にして、故宮博物院の見学に行つた。皆、イヤホーンを付けて会場内へ。白菜の形をした翡翠をはじめ、国宝級の珍品を数多く見た。さらに世界一の高さを誇る504メートルの台北101ビルに足を伸ばし、37秒で上まで行くエレベーターにも乗つた。屋上からは台北市内が一望出来、その眺めはすばらしく充実した一日だった。

8月3日—専用バスで免税店で最終のショッピング。買物にも少し馴れ、楽しい時間だった。13時発、全日空で帰国の途へ。三日間雨も降らず快適な旅だった。17時10分成田空港に到着。恩地春洋団長のごあいさつで解散した。

みんな元気で無事大役を果して帰国出来たことに感謝の気持ちでいっぱいだった。同行くださった中村宏ドクターには心から厚くお礼を申し上げます。秘書長の千葉蒼玄先生、ありがとうございました。

○相談役 小伏竹村 (全国優勝塾・
竹扇会代表)

「万台学生友好交流 席上揮毫大会」に随行して
正面上には「台灣学生・日本全国学生友好揮毫大会」と赤地に白文字に染め抜いた10メートルほどの横幕が張られ、正面には、紺色の大きな下敷きが敷き詰められた席上揮毫用の机が整然と並べられていました。中国書法学会理事長謝季芸(女性)先生を始めとして、同学会副理事長の穆希先生・陳煥明先生・陳振邦先生、さらに元老として当日の相談役を務めておられた同学会顧問・



第60回記念全国学生書道展台湾見学の旅

龍山寺

2008.8.1

林彦助先生等が非常に友好的に応接され、子どもたちの席上揮毫も笑顔の内に順調に進行しました。

まず、高校生と大学生とで友好揮毫が始まりました。台湾も日本も選び抜かれた人たちであるだけ、参觀している私たちも舌を巻くうます。続いて中学生と小学生です。日本の子どもたちは画仙紙に2字から4字くらいを大きく堂々と、しかもかなりのスピードで書き進みます。台湾の子どもたちは、ほとんどが多字数で、しかもゆっくりと書いていきます。執筆は、異口同音に「撥鎧法」で、筆軸は直立して運筆される。日本の子どもが側筆で一枚書く間に一行しか進まない。書の教育の「ねらい」が日本と台湾とでは全く異なると思われます。

揮毫大会後、屋食会が開かれ、一つの円卓に日本、台湾半数づつが座りました。どうなることかと心配して見ていましたが、終わり頃にはメールアドレスの交換をしていました。日本の子どもたちも国際人ですね。涙がでるほど嬉しかったのを思い出しています。

○相談役 倉林智子（紅瑠）全国優勝

「日台青少年文化交流の旅をして」

今回の「台湾見学の旅」の目的は、揮毫大会を通じた日台青少年の書の交流でした。

揮毫会への台湾側参加者は台湾全土から選ばれた30名の実力者揃い。台湾

の作品は多字数作品が多く、技術の高さに感心しました。日本側は、小中学生は「平和」「友情」などの友好を表す言葉が並び、高校生・大学生は漢字・少字数作品・漢字仮名交じり書などのバラエティーに富んだ作品が多く見られました。リハーサルの時に比べ、見違えるほど自信に満ちて堂々と揮毫していました。

交流屋食会後は、写真を撮り合い、見てもうしきりに見ています。リハーサルの時に頼もしさを感じました。

揮毫した作品を交換しましたが、このところにはすっかり気持ちが通じ合いました。別れがつらい様子でした。この光景を見

て、書を通じて台湾学生と交流し、振り果たすことができましたと確信しました。

帰国後、群馬県では第32回全国高等

学校総合文化祭（ぐんま大会）が開催され、日本側は4人を歓迎し、台湾での思い出に花を咲かせました。

最後に、この「台湾見学の旅」を企画してくださった恩地先生をはじめ、揮毫大会の開催にご尽力いただいた中

国書法学会に深く感謝いたします。

○宇田川春香（鳥取県北栄町立北条小学校6年）

「台湾旅行の思い出」

8月1日は、成田空港から飛行機に乗りました。飛行機は初めてだったのですが、ちょっと不安でしたが、そんなに

こわくありませんでした。いろんなサービスやテレビも見れてすごく楽しかったです。台湾に着き、リュウさんとい

うガイドさんに説明を聞きながら、龍山寺に行きました。おそなえ物が、たくさんありました。

8月2日は台湾学生との交流会がありました。私は平和と書きました。しっかり書けてよかったです。台湾の人は上手でした。その後、台北101に行きました。すごく高かったです。

私は友達がたくさんでき、夜にはいろいろなお話がてきて、とても楽しい

旅になりました。がんばって書いて良い賞を受けたので、とてもうれしかったし、これからも、がんばって書きたく思います。

旅になりました。がんばって書いて良い賞を受けたので、とてもうれしかったし、これからも、がんばって書きたく思います。



立って席書する日本の学生たち

○佐久間歩（宮城県白石市立白石中学校3年）

「台湾学生との交流席書大会」

席書大会において、私は台湾の学生達は大人の字を書くなあと思いました。

また、私達日本人の書いた作品を熱心に観察していましたので、勉強熱心だなとも思いました。

友好揮毫大会は、私にとってたくさんの刺激になることが二つありました。私もある位、大人の字を書いてみせる

と競争心が沸き立つことと、私よりも小さい子もいるのに、皆細かくてき



台湾の学生による席書の様子

み、決して大きくなはないけれど世界平和へと繋がる第一歩となるということを深く実感した友好揮毫会でした。

台湾学生と日本学生が揮毫をもつて

書の交流をすることはとても緊張する

ことでした。台湾の大学生や高校生はもちろんですが、小学生と中学生の技術の高さには感動しました。書道と言で言ってもお互いの作風は全く違いました。しかし、その違いがあつたことによって違いを楽しみ、お互いに関心を持ち合えたのではないかと思いま

す。言葉もほとんど通じない中ではあります。また、書道に対する熱心な気持

りましたが、書道に対する熱心な気持

ちや好きな気持ちはお互いに一本一本

の線に表れているように感じました。

様々なプレッシャーの中で書いたことは、字の面だけでなく精神的にも強くなれたのではないかでしょう。

政治上や国同士には越えられない高い壁が存在するかもしれません、人間の心には国境は存在しないんだといふことに改めて気付くことができました。本当に短い時間でしたが、この書道交流が小さな平和を生むための一部になっていたら嬉しいです。

友好揮毫大会が終わった後の昼食会。初めはしんとしていた席ですが、徐々に話もし始め、最後には写真撮影になりました。仲良しになれました。携帯で写した写真を台湾の学生のパソコンに写メルで送ってあげたら、届いたとの連絡をもらいました。

私はこれら経験を活かし、今後的生活をよりよいものにしたいです。もちろん、習字も今よりももっと上手になります。

○五藤真世（高知県立 安芸高等学校3年）

『台湾・日本友好揮毫大会』

小さな国際交流が豊かな感受性を育

○一森亞耶奈（同志社大学2年）

【揮毫大会の感想】

私自身、揮毫の経験は今回が2回目

でしたが、やはり緊張し、1枚目は思

うように書けず手慣らしとなってしま

いました。その後は2枚3枚と次第に平常に戻り、無事「習静」の2文字を

残せたので安心できて良かったです。一心不乱に書けたときは、人が見ていようと周りの状況は目に入らず、まるで時が一瞬停止していたかのように感じました。

台湾側の学生は、着席して書くスタイルで、立って腰をかがめて書く私たち日本側とは対照的でした。また、台湾側は小学生ながら、私たちと同じように与えられた半切2分の1の紙に、何文字もある古典漢文を小さい字で1文字ずつ慎重に書いていて、特にその姿には感心させられました。揮毫会を通して、同じ学生の様々な作品から刺激を受け視野も広げられたと思います。

最後に、私たちを選出して下さった諸先生方、そして書道を習わせてくれ旅行へ送り出してくれた家族の支えに感謝し、今回の経験を今後も活かしていきたいです。貴重な機会をありがとうございました。

感謝し、今回の経験を今後の書道人生に活かしていきたいです。貴重な機会をありがとうございました。

○有路千悠（明治大学4年）

【台湾席上揮毫大会】

揮毫大会は、8月2日、台北市の國立台湾科学教育館にて開催され、日本側から22名、台湾側から30名の参加がありました。

日本の学生、台湾の学生とも真剣に揮毫に取り組んでいました。また、台湾の学生の作品は全てが素晴らしいものでしたが、とりわけ小学生、中学生のそれは、私たちが圧倒されてしまうところから漢字に慣れ親しんでいた。彼らは幼い頃から漢字に慣れ親しんでいたためか、私が小学生の頃は簡単な漢字でも上手に書くことは困難でしたが、いわゆる旧字体や難解なものでも抵抗なく書いており、そこに文化の違いや、漢字文化の奥深さを垣間見ることができます。書を通じての台湾学生との国際交流は、学ぶものが多く、私の書道人生の中でも大変貴重なものとなりました。この経験を生かし、書の道に励みたいと思います。



笑顔で作品交換、友好の瞬間！

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった全日本学校書道連盟の先生方に感謝申し上げます。

※紙面の都合上お寄せいただいた報告を全文掲載することができませんでした。何卒ご容赦ください。（編集部）

平成20年度

書道芸術院

秋季展

(審査会員候補公募)

入賞者 10名

★秋季菊花賞

・漢字部

大野 梶風
河岡 北秀
蜜波羅鳳雲

・かな部

清水喜代子
庄司 紅邨

・現代詩文書部

菊田 杏仙
長島 優雨

・前衛書部

一條 紅蕭
佐藤 華炎
鮑匡子

宍塙真知子 曾我 昌子

曾我 昌子

予

告

△11月号の課題

漢字規定 (初段以上)

圖書時自娛

漢字規定 (秀級以下)

温故知新

かな規定 (初段以上) 半紙(料紙可)
しら露をこぼさぬ秋のうねりかなかな規定 (秀級以下) 料紙可
「いかならむいはほのなかにすまばか
もよのうきことのきことござらむ」かな条规定 (秀級以下) 料紙可
「さらぬだに夕べさびしき山との
霧のまがきにを鹿なくなりかな条规定 (秀級以下) 料紙可
「さらぬだに夕べさびしき山との
霧のまがきにを鹿なくなり

表紙写真 「三十帖策子」

11月20日締切

おめでとうございました。
入賞・入選△訂正▽ 569号・9月号4ページ
杉田杉 → 秋田杉

・ベン字規定

私の未熟な筆ではこの花の
千分の一の美しさも描き出す
ことはできない。しかし私は
この花をいつまでも心に留めて
おきたい

・漢字条幅規定 (初段以上)

今年花落顏色改
明年花開復誰在
樂意在泉石一

・漢字条幅規定 (秀級以下)

明年花開復誰在
樂意在泉石一

・ベン字規定

私の未熟な筆ではこの花の
千分の一の美しさも描き出す
ことはできない。しかし私は
この花をいつまでも心に留めて
おきたい

570. 11月20日締切

漢字

570. 11月20日締切

かな

570. 11月20日締切

漢字条幅

570. 11月20日締切

かな条幅

570. 11月20日締切

ペン字

570. 11月20日締切

現代詩

570. 11月20日締切

前衛

研究部

570. 11月20日締切

漢字研究

570. 11月20日締切

かな研究

のりしろ

(570)特別研究作品

出品該当部門に赤〇印

支局	支部名	題名・稿文	氏名
----	-----	-------	----

団体賞——優勝、準優勝

四、成績通知 明年1月7日(水)

「書の教室」誌上(3月号)に、上位の方は写真を、特別賞の方は氏名を発表。※お問い合わせは、全日本学校書道連盟書初め誌上展実行委員会へお願いします。

五、作品の返送は無料。

課題

○幼・小一年生用 「うし」「こま」

○小学校二年生用 「はる」「ゆめ」

○小学校三年生用 「正月」「日光」

○小学校四年生用 「文化」「平和」

○小学校六年生用 「白雪」「松竹」

○中学校一年生用 「宇宙」「新年」

○中学校二年生用 「初夢」「紅梅」

第32回「書の教室」書初め誌上展

12月8日締め切り

三、審査

個人賞——大賞、準大賞、新春賞、会長賞、副会長賞、連盟賞、他
101 0031 東京都千代田区東神田1—16—7
東神田プラザビル3階

(6) 出品先 全日本学校書道連盟
(5) 出品目録 所定の様式
(4) 締めきり日 20・12・8 必着
(3) 出品点数 一人一点

(個人一点でも出品可能)

一、作品

(1) 紙の大きさ 小画仙全紙 $\frac{1}{4}$
(たて約70cm×よこ約35cm)

(2) 文字 体
小学生は楷書

(3) 書體
中学生は楷・行書

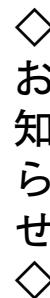
(4) 名前の書き方 「学年」「氏」「名」を本人が書く。(幼・小一是学年を書かなくてもよい。)

二、出品手続

(1) 出品票 所定の様式
(2) 出品料 一点 六〇〇円

(3) 締めきり日 20・12・8 必着

(4) 出品点数 一人一点



「書の教室」は、全日本学校書道連盟が発行している幼年から中学生までを対象にした子供向けの競書誌です。

「書の教室」書初め誌上展は、書道芸術院の関連事業であり、児童・生徒の書写教育の向上を目的としています。この書初め誌上展は、「書の教室」を購読されていない方でも出品できます。(個人(一点)でも出品できます。)

なお、詳しい募集規定(参考手本掲載)と出品に関する書類をご入用の方は、お手数ですが連盟事務局(書道芸術院事務局と同じ)あてに文書(ハガキもしくはFAX)にてお申し出ください。

書初め誌上展実行委員会 [電話 03-3862-1954
FAX 03-3862-1957]

特別昇級試験

一、しめきり日 10月20日(月)

秋季は、作品募集を次のようにいたします。

漢字 一種、二種、三種
漢字条幅 一種、二種
かな条幅 一種、二種、三種
ペン字 一種、二種、三種

かな、条幅の三種は、春季募集となります。

第二種(楷・行・草計一枚)
楷創作 煎茶竹送風
5文字を臨書

茶を煎すれば折から竹はさらさらと風をこなして送る

行臨書 蘭亭叙(蘭亭叙より12文字を臨書)

月明かに雁陣は整列している。

第三種(楷・行・草計二枚)
楷創作 蘇孝慈墓誌銘(楷書)

雲は遠方の空までしきつめて竜勢はすぐれている。秋の風は空高く吹き

第一種(一枚) 創作 はつ秋や海も青田のみどり

(芭蕉) はつ秋や海も青田のみどり

第二種(創・計一枚) 創作 名月やそばの花にて明けにけり

(季由) 名月やそばの花にて明けにけり

第三種(臨・創・計三枚) 創作 晴れ曇る影をみやこにさき

(源氏親) 晴れ曇る影をみやこにさき

第四種(臨・書) 創作 逆のぼる鮭に月飛びばやせかな

(五明) 逆のぼる鮭に月飛びばやせかな

第五種(臨・書) 創作 あらし吹く三室の山のみぢ

(高野切第三種) あらし吹く三室の山のみぢ

第六種(臨・書) 創作 葉は竜田の川の錦なりけり

(能因) 葉は竜田の川の錦なりけり

第七種(臨・書) 創作 夕されば衣手さむしたかまどの

(高野切第一種) 夕されば衣手さむしたかまどの

第八種(臨・書) 創作 尾上の宮の秋のはづ風

(高野切第一種) 尾上の宮の秋のはづ風

第九種(臨・書) 創作 和漢朗詠集和歌二首

(半紙一枚に二首書く) 和漢朗詠集和歌二首

第十種(楷・行・草計一枚) 創作 端居樂三清

(半紙一枚に二首書く) 端居樂三清

第十一種(楷・行・草計一枚) 創作 峨眉山月半輪秋

(半紙一枚に二首書く) 峨眉山月半輪秋

第十二種(楷・行・草計一枚) 創作 夜發清溪向三峽

(半紙一枚に二首書く) 夜發清溪向三峽

第十三種(楷・行・草計一枚) 創作 思君不見下渝州

(半紙一枚に二首書く) 思君不見下渝州

を臨書。

漢字部 半紙=たて長に使用

第一種(一枚) 楷臨書 高貞碑(高貞碑より)

第二種(楷・行・草計二枚) 行臨書

第三種(楷・行・草計一枚) 藩臨書

第四種(楷・行・草計一枚) 孔子廟堂碑(孔子廟堂碑)

第五種(楷・行・草計一枚) より14字を臨書

四、名前のかき方

◎どの部も氏名または名、号を書く。

◎臨書は○○臨と書く。

印だけでは失格、特にかな・ペン

字は注意のこと。

五、受験料

第一種 一、〇〇〇円

第二種 二、〇〇〇円

第三種 三、〇〇〇円

△納入は昇級試験用振替口座、または現金書留でお願いします。

△受験料は最高秀級まで

△成績に応じて、次の通り昇級させる。

△第一種は、最高秀級まで

△第二種は、最高二段まで

△第三種は、最高師範まで

△現段級とは570号の段級

△出品品はバーコード形式で作品

の右下に、一枚毎につける。

△二種は三枚つける

△申込み先

〒101-0031 千代田区東神田1-16-7

東神田プラザビル三階

書道芸術編集部特別昇級試験係

書道芸術編集部特別昇級試験係

の返信用封筒を同封のこと。

(受験番号を記入した個人専用

の応募書類を送付します。)

△送付された応募書類に必要事項

記入の上、作品に添え応募する。

△受験申し込みは、期日を過ぎま

したが、受験された方は、大

至急お申し込みください。